

日の御子・大国主と埴輪群像の大王

畠山 篤

一日の御子・大国主と埴輪群像の大王

1 日の御子・大国主と埴輪群像の大王

承前 本論は、「大国主の誕生―秘儀から顕儀へ―」「畠山」を承けて
いる。

服属儀礼への転用 宮廷の新嘗祭でうたわれた(4)〈三重の采女の勸
酒歌〉(記歌謡100)と(5)〈大后の勸酒歌〉(記歌謡101)では、
宮廷内の②神女でもある伊勢の国出身の采女が①「日の御子」＝雄
略天皇に勸酒している。また尾張の国造の新嘗祭の顕儀でうたわれ
たるう(1)〈月立ちの答歌〉(記歌謡28)では、尾張氏の②神女である
美夜受比売が①「日の御子」＝倭建に勸酒している。そして河内の国
の日女島での豊の明かり(新嘗祭の顕儀)でうたわれた(3)〈雁の卵の
歌〉(記歌謡73)の条では、日女島(姫島)の②姫＝神女が(1)のように
①「日の御子」＝仁徳天皇に勸酒している、と想定できた。そしてさ
らに年の切り替えてたうわれた(2)〈国栖の大刀の歌〉(記歌謡48)の条
でも、吉野の国栖族の②神女が①「日の御子」＝大雀(後の仁徳天皇)
に勸酒している、と想定できた。

このように並べてみると、新嘗祭・大嘗祭が政治的に拡大している
とわかる。すなわち、(4)(5)のような宮廷内の①「日の皇子」＝天皇の

誕生という儀礼が、伊勢の国の豪族を服属させる儀礼に転用されてい
る。また(1)のように、尾張の国の豪族の新嘗祭の新春の饗宴に臨席し
た①天皇(天皇に相当する者)が尾張氏に服属を誓わせている。すな
わち、尾張氏の新嘗祭の饗宴の場が服属儀礼に転用されている。これ
と同様のことが(3)日女島の新嘗祭の新春の饗宴や(2)国栖族の新春の祭
りでも行われ、服属儀礼にもなっている。このように祭を基盤にして
政が肥大化し、王権の拡張が図られている。

大国主の色好み この点、出雲王権も大和王権と同様である。①大
国主の②正妻の須勢理毘売は、越の国の沼河比売や「打ち廻る島の
埼々、かき廻る磯の埼」の「若草の妻」たち＝神女たちとの婚を容認
している。この大国主の色好みを述べる一連の神語(記歌謡2～6)
は、前述したように地方豪族の神女たちとの縁結びによる支配の強
化・拡大を主題にしている。

出雲の国造の色好み この大国主の色好みは、天照大御神の子・天の
菩比の神(天の穂日の命)を始祖にする①出雲の国の首長(出雲の国
造・出雲の臣)に継承されている。そしてその行為があまりに目に
余ったのか、平安初期の『類聚三代格』によると神事における①出雲
の国造の色好み「託三神事・多娶三百姓女子」とされ、禁じられて
いる。すなわち、国造の②一夜妻たち(神女たち)は「百姓女子」と
いわれ、年の切り替えに行われた神事における大国主の末裔の色好み
が淫靡な行為とみなされている。

日の御子・大国主と埴輪群像の大王 こうしてみるとこの顕儀における①「日の御子」と①「大国主」のあり方が、前述した①埴輪群像の大王のあり方とかなり一致していることに気づく。①「日の御子」と①「大国主」、ならびに①埴輪群像の大王は、②神女から酒杯を献上され、その傍らに③琴弾きがいる。とすると埴輪群像をめぐる解釈のうち、少なくとも(A)首長権継承儀式説、(D)神祭り説、(C)生前顕彰説が有力になる。

(A)首長権継承儀式説とは新嘗祭を基礎にした大嘗祭・首長即位式を指し、(D)神祭り説とは鎮魂祭に接続する新嘗祭の顕儀を指している。そしてこの新嘗祭は同時に、他の諸豪族を服属させる儀礼でもあり、その首長の支配権を誇示するものだった。したがって、(A)(D)は(C)生前顕彰説にもつながる。

このように埴輪群像の中心にある①大王・②神女・③側近の琴弾きの三者を見ただけでも、かほどに複数の要素が重複している。してみると、(J)複数の場面の集合体とする説が最も妥当かもしれない。そしてこの埴輪群像における三点セットが上代の伝承と合致しているのが、埴輪群像をもつ前方後円墳の分布する広大な地域に、①大王・②神女・③側近の琴弾きの三者を中核にした(A)(C)(D)(J)のような祭祀儀礼があった、と知られる。

2 日の御子へのなり損ね

日の御子へのなり損ね 今までの諸例は、①司祭者＝祭主の大王が晴れて①「日の御子」・①「大国主」になった場合である。しかしこの過程が、順調に行かない場合もあったろう。すなわち、儀礼の前半の秘儀の部分で神の認定を受けられずに、儀礼の後半の顕儀・饗宴で①「日の御子」になり損ねた場合もありうる。

仲哀天皇の廃絶と新天皇の指名 神功皇后の二回にわたる神懸かりは緊急を要する臨時の祭祀だったけれども、ここでは②神女の皇后の下した神託によって①現天皇の廃絶と新天皇の指名がなされ、そのとおりになっている。このことは、仲哀天皇が新春に①「日の御子」＝天皇になり損ねたことに準じるだろう。

してみると定例の鎮魂祭・新嘗祭(大嘗祭)でも、神懸かった②神女が①現天皇・大王あるいは新天皇・大王の予定者に代えて別の人物を天皇・大王に指名することはありえたらう。

仁徳天皇の失格宣言 仁徳記によると、②神女の女鳥の王が①仁徳天皇の求愛を拒み、仲人の①速総別の王を夫として選択し、仁徳天皇の殺害を図っている。これは②神女の女鳥が下した①仁徳天皇の失格宣言に等しく、その代わりとして①速総別を新天皇に指名したに等しい。そのようなことができるのは、②神女が現天皇の失格を告げて別人を新天皇に指名する託宣を下せるという高い意識を持っていたからである。

しかしこの女鳥のことは正式な国家的な神降ろしを通じた託宣でなかったため、①速総別の方が「日の御子」＝天皇になり損ね、②神女の女鳥とともに滅亡している。

3 大国主へのなり損ね

天稚彦の死 右の大和朝廷と同じことが、出雲王国でも生じている。前述したように葦原色許男・大穴牟遲が①「顕国王」として「天の詔琴」を弾き、②正妻の須世理毘売に神懸からせて託宣を得ていた、と想定した。そしてさらには、色好みの王として大成して①「大国主」になり、葦原の中国(出雲の国)を統治していた。

この①「大国主」の座を継承しようとしたのが、①天稚彦である。そしてこの天稚彦が、「大国主」になり損ねている。

天稚彦の伝承は、神代記、神代紀下・九段の本文・第一の一書・第六の一書に記されている。このうち神代紀の本文が詳しいので、これを次に引用する。

故、高皇産靈尊、更に諸神を會へて、當に遣すべき者を問はせたまふ。尙曰さく、「天國玉の子天稚彦、是壯士なり。試みたまへ」とまうす。是に、高皇産靈尊、天稚彦に天鹿兒弓及び天羽羽矢を賜ひて遣す。此の神、亦忠誠ならず。來到りて即ち顯國玉の女子下照姫の名は高姫、亦を娶りて、因りて留まりて曰はく、「吾亦葦原中國を馭らむと欲ふ」といひて、遂に復命さず。

是の時に、高皇産靈尊、其の久報に來ざることを怪びて、乃ち無名雉を遣して、伺しめたまふ。其の雉飛び降りて、天稚彦が門の前に植てる植、此をば多ゆつかつら。杜木、此をばとき天探女、天探女、此をば阿麻、湯津杜木の杵に止り。可豆運と云ふ。時に天鹿兒弓・天羽羽矢を取りて、雉を射て斃しつ。其の矢雉の胸を洞達りて、高皇産靈尊の座します前に至る。

時に、高皇産靈尊、其の矢を見て曰はく、「是の矢は、昔我が天稚彦に賜ひし矢なり。血、其の矢に染れたり。蓋し國神と相戦ひて然るか」とのたまふ。是に、矢を取りて還して投げ下したまふ。その矢落ち下りて、則ち天稚彦が胸上に中ちぬ。時に、天稚彦、新嘗して休臥せる時なり。矢に中りて立に死ぬ。此世人の所謂る、反矢畏むべしといふ縁なり。

(神代紀下・九段の本文)

新嘗祭の逝去 右の本文によると、天神の「天國玉」の子・天稚彦は、天神の高皇産靈から葦原の中國(出雲の國)の平定を命じられる。しかし、彼はその命令に反して葦原の中國の「顯國玉」＝大国主の娘である下照姫＝稚國玉＝高姫を娶り、「吾亦葦原中國を馭らむと

欲ふ」。その天稚彦の反逆はやがて高皇産靈の知るところになり、この神の投げ下した矢が「天稚彦が胸上に中ち」、「立に死ぬ」。その逝去の時は「天稚彦、新嘗して休臥せる時」、すなわち天稚彦が新嘗祭で仰臥している時だった。

「天若日子の伝承について」「吉井巖、六四頁」は、即位儀礼としての新嘗祭(中略)大嘗祭において聖なる稲を食べたあとで真床追衾にくるまって休臥する天皇を思い起こさせる」とし、天若日子が大王に変身する過程で死亡した、と述べている。

神代記によると、天若日子の死去は、「天若日子が朝床に寝ねし高胸坂に中りて以ちて死にき」とあるので、これは新嘗祭を終えて翌日の顕儀を控えた朝寝の床で亡くなった、と説いているようである。

顯國玉としての天稚彦 父の「天國玉」の身代わりともいふべき①天稚彦は、葦原の中國(出雲の國)を統治しようとして①「顯國玉」＝大国主の娘の②下照姫＝「稚國玉」を妻にしている。してみると「國玉」とは大和朝廷の「大八洲之靈」(生島の神・足島の神)と同じく、國土を統治する神靈の謂なので、天稚彦には父側の血統上も妻側の血統上も「國玉」になれる条件が整っている。

それで天稚彦が顯國玉＝大国主から後継者として認められたので、天稚彦は秘儀において①顯國玉になり、先代から継承した「天の詔琴」を弾いて神靈を統御したろう。そしてそれによって神懸かった②妻の下照姫＝稚國玉が神託を下して天稚彦を①「大国主」に指名し、新春の顕儀において夫の天稚彦を葦原の中國の色好みの大王＝「大国主」として称賛し、御酒を献上するはずだった。

天神と國神の指令 しかし年の切り替えの新嘗祭の最中、あるいは終了後に仰臥していた天稚彦の胸に、天神の放った矢が当たって死亡している。すなわち、天稚彦を「國玉」・「大国主」とする國神の指令と、天稚彦を認めない天神の指令という正逆の指令があり、天神の指

令がより強力だった。そこで①天稚彦は次に控えている顕儀・饗宴を目前にして絶命し、結局「国玉」・「大国主」になり損ねている。以上のように解すべきではなからうか。

この伝承は儀礼を通じた神女の託宣による新大王の指名の形を取っていないけれども、神話という語りの形態を取って神意に適わないために大国主になり損ねたことを述べており、その内実は同じである。

初代の大国主誕生の指令 こうしてみると根の国の主神・須佐之男が葦原色許男・大穴牟遲にむかって「出雲の国を武力で支配して八千矛の神になり、さらに①大国主の神になり、また①宇都志国玉の神になって②須理理毘売を正妻にし、宇迦の山の山本に、立派な宮殿を作って住め」といった予祝は、この葦原の色許男・大穴牟遲の将来が神の国の偉大なる主神によって確実に保証された指令だった、と改めて確認できる。かほどに強力な神の支持を得てこそ、初代の①大国主は誕生しえた。

このような根の国の主神から地上の王に発せられる力強い予祝は、通常ならば②神女の口を通じて下される託宣の形を取っている。

してみると、「日の御子」や「大国主」になろうとする①大王たちが、偉大な神々を憑依させる優れた②神女をいかに多数獲得して妻にしたかったかも、改めて理解できる。

4 王を決める神女

尚宣威の退位と尚真の即位 琉球の首里王府にも、神の指令を受けられないまま王になり損ねた事例がある。それは第二尚王朝の二代目の国王・尚宣威の即位にかかわる異変である。この王は神の認証を受けられず、一旦政治的に即位した王位から直ちに退き、幼い尚真が即位している。

首里王府も大和王権や出雲王権と同じく、祭政一致体制を基礎にしており、霊性の高い女性たちが強固な祭祀組織を持ち、国王を頂点にした政治組織と連携していた。すなわち王位は、太陽神の出現する祭祀の場で祭祀組織の神女たちが王の名を告げるものだった。

首里王府編纂の歴史書『球陽』巻三（一七四五年）によると、次のように国王に認定される予定の尚宣威は、明の成化十三年（二四七七）に執り行われた祭祀の場で別の名（尚真）を聞く羽目になった。なお引用文には理解の便宜のため、ルビと「」を新たに付した部分がある。

即位元年（明の成化十三年丁酉）

尚宣威、尚真幼冲の故を以て、権りに大位に登る。是の年二月、陽神君手摩、出現す。尚宣威、以て慶賀の礼と為す。而して例に照し、衣冠を穿ちて王位に坐す。尚真、其の側に侍坐す。

旧例は、国君位に即けば、君君・諸神、賀を作し、必ず内殿より出でて奉神門に至り、後、東面して立つ。奈んせん此の日、皆西面して立ち、旧例と異なる。満朝の臣士、驚き疑ひて措く無し。

頃間ありて諸神託宣する有り、「世子尚真を以て君と為す」と。

尚宣威、託言を聞き諸臣に謂ひて曰く、「尚真、幼冲なりと雖も、誠に是れ命、世の真主なり。爾等宜しく心を同じくして輔翼し、以て邦家を保つべし。我は其の命に非ず。強ひて大位を踐めば、恐らくは天に返ること有らん」と。遂に尚真を奉じて君と為す。而して在位六個月にして越来に退隠す。 （『球陽』巻三）

太陽子の認証式 琉球王朝の①国王は「太陽子」（太陽神の子孫。ティダはティラともいい「照ら」の義）であり、その認証を下す中心にいるのが②「陽神」＝太陽神を憑依する（あるいは太陽神の化身）の「君手摩」である。ただしそれは名目上のことで、次の国王を指名できるのは最高神女の聞得大王を頂点とした神女組織だったろう。そし

てこの「太陽子」を認定する祭祀で、②神女たちが幼い①尚真を王（太陽子）にするという託宣を下している。既に政治的に王となっていた①尚宣威は、この託宣によって完全な王になり損ね、半王で終わっている。

尚宣威に代わって②神女たちに名前を告げられた①尚真王は、ほぼ半世紀に亘るその治世で神女組織を厚遇している。そして、「イザイホー」と名付け「久高島」「畠山」が述べるように、王府の神の島・久高島のイザイホーなどの国家祭祀を整備してこの王朝の祭政一致体制を強化し、琉球王朝の最盛期を誇っている。

王を決める神女 国土も時代も異なり、弾琴の有無の相違もあるけれども、祭政一致体制をとっている点で大和王権も出雲王権も近世以前の琉球王権も根は一つである。とくに大和王権の天皇は「日の御子」（太陽神の子孫）といわれ、琉球王権の国王も「太陽子」（太陽神の子孫）といわれ、ともに太陽神の承認を受けて王に即位している点で共通している。そしてこれら三つの王権（さらには全国各地の小王権）では、②神女が①王を決めており、祭が政に及ぼす影響力には強力なものがあつた。

一一 結び

1 秘儀・顕儀・歌劇

本格的な神懸かり 以上、上代の日本の琴の伝承のうち、（一）神霊を統御する琴の場合と、これに連動する（四）儀礼・芸能を統御する琴の場合をみた。①男子の司祭者＝為政者（社会のリーダー）は琴を管理し、この琴によって神霊を統御している。そしてこの琴によってコントロールされた神霊は、②女性シャマンに憑依して神懸かり、シャマンはさまざまな神態を演じながら託宣を下している。そしてこ

の託宣を解釈して確定する者として③側近の審神者がおり、神（その実態は②女性シャマン）と問答を交わしたりしながら莊嚴な晴のことば＝祭祀文学を生み出していた。

その典型が神功皇后の神懸かりであり、その一類が石坂比賣の神懸かり、美奴売の松原の条での神懸かりなどである。また天の宇受売の神懸かりを語る天の石屋戸神話、大国主の天の詔琴の伝承、神奈備の神依板の存在、琴頭に來居る影媛の伝承、武内の宿禰の母の影媛の伝承も、琴を用いた本格的な神懸かりを背景にしている。

様式化した神懸かり その琴による②神女の神懸かりは、時には様式化した神態を演じ、予定調和的な託宣を下していた。その典型が吉野の童女の舞の伝承や忍坂の大中姫の舞の伝承であり、天の石屋戸神話における天の宇受売の神懸かりである。

このうちの②天の宇受売の神懸かりは、宮廷に仕えた女系の神女・猿女氏の神態である。すなわち天の宇受売を始祖にする②猿女氏の神態は、弾琴を伴う大和王権の鎮魂祭を基盤にしており、それは太陽神の復活（春の到来）をもたらしとともに、①「日の御子」＝天皇を指名するものだった。

秘儀の三点セット このように秘儀における三点セットによる神懸かりが様式化してくると、③側近の審神者の影が薄くなる。そして③側近の審神者は①司祭者の琴弾きを兼任するようになる。

以上の本格的な神懸かりと様式化した神懸かりは、秘儀性が高い。

太陽を招く鎮魂祭・新嘗祭・大嘗祭 右の鎮魂祭に連続しているのが、やはり弾琴を伴う宮廷の新嘗祭・大嘗祭である。この宮廷の儀礼の豊の明かりの節会＝饗宴では③琴を弾く職掌は側近に移り、①司祭者の天皇（大王）は太陽神の子孫＝「日の御子」として復活・誕生・即位し、弾琴を伴う勸酒歌をうたいながら②神女が①「日の御子」＝天皇に御酒を献上している。そして、その勸酒の儀礼でうたわれる

天語歌の最後を飾る囃子詞「琴の語り言も是をば」は、③側近の彈琴者がうたうものだった。

またこの饗宴における御酒献上の儀礼は、諸豪族を服属させる政治的な場としても展開している。

歌劇化・歌物語化された天語歌・盞歌・静歌 そしてこの新嘗祭の御酒献上の儀礼歌の由来として、天語歌とこれに準じる盞歌と静歌が琴を用いて雄略記に歌劇化・歌物語化されている。御酒献上の歌はないけれども、これら新嘗祭の秘儀と頭儀を舞台にする歌劇・歌物語の一群に数えられるのが、允恭紀の忍坂の大神姫の舞の伝承^{そとほし}衣通の郎姫の伝承である。

歌劇化・歌物語化された『万葉集』の巻頭歌 これはさらに『万葉集』の巻頭歌にも及び、万葉時代における古代の英雄の代表である雄略天皇の新春の頭儀における色好みと御酒献上が琴を用いて歌劇化・歌劇化されている。

顕国玉から大国主へ このあり方は、出雲王国でも同様だった。すなわち①出雲の王^{うつしんたま}首領（その始祖は葦原色許男・大穴牟遲^{おほなむぢ}）は、秘儀においては①顕国玉として天の詔琴を弾いて神霊を統御し、②正妻の神女（その始祖は須勢理毘売^{すせりびめ}）を神懸からせ、託宣を得ていた。その場には、③側近の審神者^{さしに}もいたろう。

そして次に催される頭儀では、①出雲の大王は②正妻の神女から「吾が大国主^{おほくにぬし}」と賛美され、御酒を勧められていよう。この正妻の神女が御酒を勧める時に勧酒歌をうたい、その時には③側近が琴を弾いていた。**歌劇化・歌物語化された神語** そしてこの頭儀を琴を用いて歌劇化したのが、神語である。そのあり方は、基本的に天語歌などの歌劇化・歌物語化と同じである。

歌劇化・歌物語化された月立ち贈答歌 この三点セットの歌劇・芸能は、大和王権や出雲王権のみならず、尾張の国造レベルでも行われ

ている。「日の御子の誕生」で前述したように、尾張の国造の新嘗祭の饗宴でうたわれた①〈月立ち贈答歌〉（記歌謡28・29）は、倭建への服属の歌物語・歌劇の形態をとっているものの、その基盤には尾張氏が執行する秘儀に接続した元旦の頭儀がある。そしてその中核は①国造・②神女・③側近の琴弾きの三点セットによる献酒の儀礼だった。

頭儀の三点セット そしてさらには、このような①玉座にいる大王、②献杯する神女、③琴を弾く側近の男性のあり方は、頭儀の三点セットとして新春の饗宴の中核になり、前方後円墳の埴輪群像の中心に形象化されている。とすれば前方後円墳の分布する地域には、右のような秘儀とそれに連続する頭儀における三点セットの祭祀があり、大王をめぐる祭祀伝承があったということになる。

以上の新嘗祭・大嘗祭などの饗宴は、見せることを強調した頭儀になっている。

2 神霊を統御する琴から 儀礼・芸能を統御する琴へ

神霊を統御する琴 以上、①司祭者^{さしに}祭主としての大王、②神霊を憑依させる女性シャマン、③託宣を確定する側近の審神者、という一つ目の三点セットは、シャマニズムを基盤にした秘儀になっている。そこでこの琴の働きは、琴の五つの様態のうちの（一）神霊を統御する場合である。

そしてその秘儀の内部において、その組み替えがかなり柔軟に行われ、時には③側近の審神者が琴弾きをも務めている。そのような秘儀の代表が、例えば大和朝廷の鎮魂祭である。

頭儀を統御する琴 そして鎮魂祭に接続する新嘗祭や大嘗祭（即位儀

礼)の顕儀などに至ると、①大王は②神女から勧められる御酒を飲むだけの役になる。こうして玉座にいる①大王、②御酒を大王に捧げる神女、③琴を弾く側近の男性、という二つ目の三点セットが、饗宴における顕儀の中核になってくる。そしてこの饗宴における琴の働きは、(四) 儀礼を統御する場合に変容する。すなわち(一) 神霊を統御する琴は、(四) 儀礼を統御する琴に接続している。

歌劇・芸能を統御する琴 そしてさらには、この顕儀は歌劇化され、新春の顕儀の場で演じられている。その時は、③側近の弾く琴を伴奏にして①主役の伝説的な大王(雄略天皇・仁徳天皇・允恭天皇・倭建・大国主など) 役と②伝説的な神女(三重の采女・大后わかくさかべ若日下部みこの王・菜摘なつます兒こ・忍坂おしさかの大中姫おほなかつひめ・衣通いとつめの郎女みづめ・美夜受みやすひめ比売ひめ・須勢理毘売すせりひめなど) 役の俳優が歌をうたいながら役を演じている。

以上、(一) 神霊を統御する琴は(四) 儀礼・芸能を統御する琴に変容し、祭(秘儀)から政(顕儀)・芸能へという二重構造を持ち、豊かな世界を作り上げている。

テキスト

萩原浅男・鴻巣隼雄 一九七九 『古事記上代歌謡』 小学館

球陽研究会 一九七四 『球陽』 角川書店

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 一九六八 『日本書紀上』 岩波書店

辰巳正明 二〇一四 『古事記歌謡注釈―歌謡の理論から読み解く古代歌謡の全

貌―』 新典社

土橋 寛 一九七六 『古代歌謡全注釈―日本書紀編―』 角川書店

一九八九 『古代歌謡全注釈―古事記編―』 角川書店

土橋 寛・小西甚一 一九六四 『古代歌謡集』 岩波書店

引用文献・参考文献

大阪府立近つ飛鳥博物館編 二〇〇八 『埴輪群像の考古学』 青木書店

畠山 篤 二〇〇六 『イザイホーと名付け「久高島」』『沖縄の祭祀伝承の研究

―儀礼・神歌・語り―』 瑞木書房

水野正好 一九七一 『埴輪芸能論』『古代の日本 第2巻 風土と生活』 角川

書店

吉井 巖 一九七六 『天若日子の伝承について』『天皇の系譜と神話 二』

塙書房

若狭 徹 二〇一二 『もっと知りたい はにわの世界』 東京美術

二〇一七 『古代の東国1 前方後円墳と東国社会』 吉川弘文館